
一番幸せな誕生日

ユーリ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

一番幸せな誕生日

【NZマーク】

NZ539E

【作者名】

コーリ

【あらすじ】

朝風理沙は、泉の家で美希に言つた言葉がキッカケでハヤテの事が頭から離れなくなる日が続いた。果たして、この気持ちの答えは何なのだろうか・・・!?

(前書き)

この話は、『ハヤテの「」とくー!』第16巻の第70~第111話のその後の話という設定です。

先に1~6巻を読む事をオススメいたします。

恋愛って、実に不思議なものだよね。

ほんの些細な事がキッカケで、好きになつたりするんだからさ。

これは、ある言葉がキッカケで晴れて恋人同士になつた、2人の男女のお話である・・・

やあ諸君、元気かな？

私は朝風理沙、花も恥じらう16歳だ。

これでも私は朝風神社の娘で、白皇学院という名門校に通うお嬢様なのだよ、フフフ・・・

ちなみに生徒会役員の一人で、担当は風紀委員だ。

通称『敵か味方か風紀委員ブラック』！

と、そんな事はどうでも良い。

本題を言つと、7月13日は私の誕生日なんだ。

つまり、今日だ。

誕生日プレゼントについては別に心配などしていない。

毎年泉やヒナ達にもらえたからだ。

実際今年ももらえたしな。

物忘れが多い私のおじいちゃんからもこの日だけはちゃんとプレゼントをもらえるし。

それよりも気になっている事が一つだけある。

私のクラスメイトの一人、三千院ナギ君の執事をしている綾崎ハヤテ・・・ハヤ太君の事についてだ。

実は私、なぜかここ数日彼の事が頭から離れないのだ。

こうなった原因は恐らく、以前引きこもってしまった泉を元気づけるためにハヤ太君や美希と一緒に行った泉の家でのあの一言が発端だと思つ。

『だつて・・・ハヤ太君は私にゾッコンだろ?』

この一言だ。

あの時私は何気なく言ってみただけで、別にハヤ太君が好きだとかいうのはまだハツキリわかつていなかつた。

美希には『オマエ・・・ホントバカなんだな・・・』と一蹴されたけどな・・・

だがあの日から、私の脳裏にはいつもハヤ太君の顔が浮かぶように

なってしまったんだ。

最近じゃ夢の中まで出て来るし・・・

なぜだの?・

ハヤ太君の笑顔が脳裏に焼きついて離れない・・・

いくら考えても、明確な答えが出なくて・・・

これではまるで恋する乙女ではないか!

小1時間程悶々とした私は、決意した。

三千院家に行き、ハヤ太君に会おうと。

そうすれば、このモヤモヤの謎も解けるだろ?と。

そう思つた私は、ハヤ太君に会つために三千院家に向かつた。

三千院邸

理沙は三千院邸に着き、マリアと玄関で会話していた。

マリア

「こりひしゃい朝風わん。本日は何の用ですか?」

理沙

「えっと・・・ハヤ太君に会いたいんですけど、彼今ビリビリこますか?」

マリア

「ハヤテ君なら、ナギと一緒にゲームしますよ。呼びましょうか?」

理沙

「あ、それならコンビングで待たせてもらいます。」

理沙はそう言つと、リビングへと向かつた。

数分後、ハヤテとナギがリビングにやつて來た。

ハヤテ

「こんにちは、朝風さん。」

ナギ

「よく来たな、朝風。」

理沙

「やあハヤ太君、ナギ君!こんにちは。」

ナギ

「今日は何の用で來たんだ?何なら今から一緒にゲームでもするか?」

理沙

「ああ、それも良いんだけど・・・実は今日、私の誕生日です。」

ハヤテ

「そういえば前に言つてましたね。」

ナギ

「私もハヤテから聞いた。だからけやんとプレゼントは用意してあるぞ。」

ナギはわざと、イスの上に置いてある袋を持って来た。

ナギ

「私からのプレゼントはポータブルカラオケだ、しかも最新型だぞ。」

ナギは理沙にプレゼントを渡した。

理沙

「ありがとうございます、ナギ君。楽しんで使わせてもらつよ。」

ハヤテ

「ボクからはこれです。」

ハヤテは少し大きめな袋を理沙に渡した。

理沙が袋を開けると、中に桃色のカチューシャが入っていた。

ハヤテ

「朝風さんに似合つと思つて選びました。頭につけてみてください。」

「

理沙は頭にカチューシャをつけた。

理沙

「うわあ、カワイイ。私にピッタリだ。ありがとうございます、ハヤ太君。」

ハヤテ

「いえいえ」「

ハヤテは笑顔を見せる。

理沙はその笑顔に見惚れた。

理沙

「あ、マリアさん。ちょっと庭を散歩して來ても良いですか?」

マリア

「良いですけど、一人で大丈夫ですか?」

理沙

「大丈夫ですよ、私は方向音痴じゃないので。」

そつ言つと、理沙は走つて行つた。

理沙は三千院邸の庭を散歩していた。

その顔は少し紅くなっている。

理沙

「（ハヤ太君、あんな笑顔を私に見せるなんて・・・恥ずかしくてマトモに顔を見れないよ・・・やっぱり私、ハヤ太君に恋をしているんだな・・・）」

しばらく歩いていた理沙は、立ち止まった。

理沙

「・・・決めた！ フラれたってかまわない！ 私の気持ちをハヤ太君に伝えようーー！」

理沙はそう決心した。

理沙

「そろそろ三千院邸の方に戻ろう・・・あれ？」

三千院邸に戻ろうとした理沙は、急に立ち止まった。

理沙

「ここ・・・どう？」

そう、何と理沙は道に迷ってしまったのだ。

理沙

「ウソオオオーーー」の私が迷子おおおーーー？」

理沙は辺りを見回すが、自分が今どこにいるのか見当がつかない。

理沙

「三千院邸の庭の規模をあまり見てたな・・・しかもこの辺圏外みたいだし・・・」

携帯の圏外表示を見た理沙は、困り顔をした。

理沙

「まあもうしばらく歩けば圏外表示も解除されるだろ？。それまでの辛抱だ、少し走ろう。」

そう思った理沙は、走り出した。

タタタ・・・

その時である。

理沙の足が何かを踏んだ。

グニッ！

理沙

「へ？」

理沙が前方に目をやると、そこにはヘビが寝ていた。

ヘビといつても、ワカバニ 蟒蛇程くらいの大きさがある巨大な大蛇である。

つまり理沙はそのヘビの尻尾を踏んでしまったというワケだ。

『シャー?』

ヘビは何か感じたのか、目を開けた。

そして、自分の尻尾を踏んづけている張本人を見た。

『シャーツ!』

ヘビはあまりの痛さに吠え^ほ、理沙を睨みつけた。

理沙

「キヤアアアアアア!」

理沙は悲鳴を上げると、一目散に逃げ出した。

このままここにいれば、自分がどうなるかわかりきっているからだ。

『シャー!』

ヘビは一瞬呆気にとられたが、すぐにハツとし理沙を追い始めた。

人は死の恐怖に直面すると、何とか生きようと必死になる。

無論、理沙も例外ではなかつた。

全速力で走っているし、ヘビが彼女を追い始めるまで間があつたので、少なくとも今は距離がだいぶ開いている。

だが、もし油断すればあつとこう間に追いつかれてしまうだらう。

そうなれば、理沙の命は風前の灯火も同然だ。

理沙

「ハアハア、ハアハア・・・（もつと速く逃げなきや・・・もし）
こで倒れたら、私は終わりだ！！」

理沙はそう思い、必死に走る。

だが、その焦りが理沙に油断を与えてしまった。

彼女は足下にある小石に気づかなかつたのだ。

ズツ！

理沙

「キャッ！」

理沙は小石につまずき、転んでしまった。

ドサッ！

理沙

「イタタ・・・」

頭をさする理沙。

そんな彼女の耳に、イヤな音が聞こえた。

シユルシユル・・・

理沙

「！！」

理沙が恐る恐る振り返ると、さつきのヘビがやつて来ていた。

彼女はヘビに追いつかれてしまったのだ。

『シャーー！』

理沙

「キヤアアアアアッ！！」

理沙は悲鳴をあげる。

『シャーー・・・・』

ヘビは舌をチロチロさせると、口を大きく開けた。

ゆづくりと理沙に近づいて来る。

理沙

「あ・・・あ・・・」

理沙は震えながら後退あとずかずつた。

ウワバミ類のヘビは、ゾウをも飲み込めるほどに口を大きく開けられるといつ。

か弱い少女一人の体など、たやすく丸飲みできる事だらう。

理沙

「う・・・」

理沙はガタガタと震えている。

その顔には恐怖の表情が浮かんでいた。

理沙

「（わ、私ここで死ぬの・・・？イヤだ！ヘビに食べられて死ぬなんて！－！まだ私、ハヤ太君に気持ちを伝えていないのに・・・こんなところで終わりたくない！－）」

理沙は泣きそうになっていた。

彼女はここで、以前ヒナギクから聞いた事を思い出した。

呼べば、ハヤテがどんな危機にも駆けつけて来てくれる事を。

『シャーツー！』

ヘビはさりに口を大きく開け、理沙を飲み込もうと襲いかかって来た。

理沙

「助けて、ハヤ太くん！－！」

理沙はハヤテの名前を叫んだ。

ヘビがまさに彼女に食いかかろうとした、まさにその時であった。

「疾風の如く！！」

ヒュッ！！

どこからかハヤテが飛んで来て、理沙を抱きかかえ木の上に飛んだ。

トンッ！

ハヤテ

「大丈夫ですか、朝風さん？」

理沙

「あ、うん・・・大丈夫・・・」

理沙は赤面していた。

ハヤテ

「とりあえず、先にあのヘビを何とかしないといけませんね。朝風さんはここでジッとしていてください。」

理沙

「え？ 何とかするつて、ハヤ太君どうやって・・・」

ハヤテ

「疾風の如く・閃光！！」

ハヤテは木の上から飛ぶと、ヘビの頭を直撃した。

ズガンッ！！

ヘビはふりつか、そのまま倒れた。

ズズン・・・

間髪入れずにヘビめがけてナイフを投げ、トドメを刺す。

ドスッ！！

ハヤテ

「これでヘビは倒しました。朝風さん、もう大丈夫ですから降りて来てください！」

ハヤテは木の上にいる理沙に言った。

理沙

「う、うん、降りたいんだけど・・・足がすくんで、動けないんだ・・・」

理沙は子猫のように縮こまつている。

ハヤテ

「わかりました。少し待ってください。」

ハヤテはそう言つて木の上に飛ぶと、さつきと同じように理沙を抱きかかえた。

バツ！

理沙

「キャッ……」

そのまま飛び降りると、彼女を抱えたまま歩き出した。

理沙

「（）、（）の状態つて……（）」

裕に書いた『姫様抱っこ』である。

理沙

「（は、恥ずかしい……でも、ハヤ太君にしてもうひとつから良
いかな……）」

理沙は、顔が赤くなっていた。

じぱりく歩くと、ハヤテは理沙を降ろした。

ハヤテ

「もう歩けますか？朝風さん。」

理沙

「う、うん……」

ハヤテ

「ありがとうございます、良かったです。」

ハヤテは満面の笑みを見せる。

理沙はその笑顔に惹かれた。

理沙

「な、なあハヤ太君……」

ハヤテ

「何ですか、朝風さん？」

理沙はハヤテの顔に見惚れながらも、決意したようにハヤテに言った。

理沙

「ハヤ太君……私は君が好きなんだ。」

ハヤテ

「え！」

ハヤテは突然の告白に驚いた。

ハヤテ

「なぜ、朝風さんがボクの事を？」

理沙

「ホラ、こないだ泉の家に行つただろ？あの日私は美希と一緒にしばらくいたんだが、その時私『ハヤ太君は私にゾッコンだろ？』と美希に言つたんだ。

その日から、ハヤ太君の事が頭から離れなくてさ。

このモヤモヤは何なんだろうとずっと考えていたんだが、今日三千

院家で君に会つてプレゼントをもらつた時に気づいたんだ。私は君の事が好きになつていたんだってな。でもハヤ太君には私以外にも想いを寄せている人がいるし、私にはヒナや泉に勝てる要素がない。ハヤ太君に選ばれないかもしない……そう思つてたんだ。

ハヤテ

「・・・」

理沙

「でも、さつきヘビに襲われた時、ここで死にたくないと思つた。せめて君に想いだけでも伝えておきたいって……そう思つたんだ。だから、迷惑かもしれないけど聞いてほしい！私、理沙は……ハヤ太君の事が好きです！！」

理沙の告白に、ハヤテはしばらく沈黙する。

そして一ノッと微笑むと、理沙を抱き締めた。

ギュッ！

理沙

「ハ、ハヤ太君！？」

理沙は赤面する。

ハヤテ

「ボクも朝風さんの事が好きです。ボクは朝風さんの家に行つたあの日から、朝風さんの事が気になつていたんですよ」

理沙

「そ、そんな前から……ありがとうございます・・・？」

ハヤテ

「はい、喜んで」

ハヤテと理沙は、キスをした。

その後私とハヤ太君は三千院邸に戻り、ナギ君とマリアさんに交際を発表した。

2人共最初は驚いていたが、快く私達の関係を認めてくれた。

今年の私の誕生日は、今まで一番最高な日になったと思う。

あの日からずっと気になっていた、男の子と恋人同士になれたのだから。

私は今、とても幸せです。

ハヤ太・・・

イヤ、ハヤテ君・・・

大好きですよ

必ず幸せになりますようね

完

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6539e/>

一番幸せな誕生日

2011年1月25日02時31分発行